

2011年  
5月19日  
木曜日

高林喜久生 教授（財政学）

# 私が銀行員だったころ

私は、1977年に大学を卒業して1990年に退職するまで13年間、35歳まで銀行員であった。もう20年以上も前のことである。なぜ、今さらこんな古い話をするのか。実は、最近、書類整理をしていて銀行員当時の書類や日誌類が出てきたのだ。それを見ると当時のいろんな忘れていたことがフラッシュバックしてきた。振り返ってみると、私

のたどった道は、当時の日本の企業社会の特徴を反映していると思えるのだ。

私は、銀行員勤めの最初の5年半ほど名古屋の支店で個人預金の外回り営業をしていた。入社2年目当時の外回り日誌を見ると、上司から、「努力は認めるが効率が悪い。往訪件数をアップしろ」と色鉛筆で書き込みがされている。「朝9時半までに店を出ろ」とも書かれている。私

はかなり要領の悪い銀行員であったようだ。しかし、それでもだんだん仕事に慣れてきて入社5年が過ぎ、転勤のタイミングが近づいた。私は人事部に嘆願書を出しており、今回その写しも出てきた（嘆願書を出したことなどすっかり忘れていた）。

「ぜひ東京の融資店部に転勤させて欲しい。」と書いている。実は入社前は関西（浜辺）の店部を人事部に強く希望した。しかし入社6年目には是非、東京に行きたいと変わった。1970年代以降、東京一極集

中が進んでいくなかで、私自身もこれからは経済活動の中心は、ますます東京になると肌で感じたのだ。嘆願書を出した顛末はどうであったか。東京は東京だったが景気予測などを担当する調査部という部署であった。なぜ銀行にそういう部署があるか。銀行の経営にとって将来の

経済情勢や金融為替状況をどう見るかはとても重要なのだ。私は、預金集めから景気予測の担当に変わったのだ。昨日まで預金集めという営業の最前線にいたのに、今日からは研究者のような仕事をするのである。日本の企業のすごいところは、こういう人事異動を平気ですることにあると思う。そして労働者側の柔軟な対応もかなりのものである。

私自身は、景気予測を担当する部署に配属されて、そこでの仕事が目分に合っていることがわかった。その後、紆余曲折があったがそのときの人事異動の結果が今に至っている。関学経済学部の教員として皆さん方の前に立っている。

私の銀行員生活は前半が預金集めの仕事、後半が経済調査の仕事になった。同じ会社のなかでも両者は大きく違うところがある。外回り営

業の仕事は働き（生産性）が目に見えやすいが、経済調査のようなスタッフの仕事は働きが見えにくいのだ。預金集めでは往訪件数とか獲得預金額という数字で生産性が計れる。上司の指導の仕方も明らかに違う。経済調査では単純にレポートの本数が働きとはいえない。

それから銀行を辞めたときの退職金の通知書も「発掘」された。上に述べたように私は銀行に13年間勤めた。定年（60歳）まで在籍すると38年間勤務になる。私はその3分の1の期間を勤めたことになる。定年まで勤めると退職金は3000万円程度支給されたはずであるが、私が受け取った退職金はその10分の1以下であった。日本の企業（とくに大企業）は年功序列制をベースにしていることもあらためて思い知ったのである。

■